

■支部の歴史■

新潟県小児保健研究会の歩み

浅見 直 (新潟県保健研究会・前事務局担当 新潟大学医学部小児科)
 内山 聖 (新潟大学医学部小児科教授)

新潟県小児保健研究会は昭和33年に日本小児保健研究会の支部として、小児保健に携わる小児科医師、保健婦、助産婦、看護婦団体、行政(当時の県衛生部)を糾合し、その事務局を新潟大学医学部小児科に置いて発足した。発足以来、新潟大学医学部教授が3代にわたり会長を務めてきている。研究会の演題を中心に各時代を振り返ってみたい。

小林会長時代(昭和33年~50年度, 第1~15回)

昭和33年に新潟大学小児科小林収教授を会長として第1回の研究会が開催された。以後、歴代の会長は新潟大学小児科教授がつとめている。昭和33年に第1回の研究会が開催された。この時の演題は

- 小児の難聴を巡って(磯野 弘先生, 新潟大学耳鼻科)
- 未熟児の病気とその予防(馬場一雄先生, 東京大学小児科)
- 未熟児のとりあつかいの実際(前田アヤ先生, 聖路加短大)
- 肢体不自由児の実態とその医療(河野左宙先生, 新潟大学整形外科)

などである。昭和34年の第2回には一般演題と佐野宣正先生によるくる病の講演があり、当時、栄養不足がまだまだ社会問題の一つであったことをうかがわせる。

昭和30年代は赤ちゃんコンクールが全盛の時代で当研究会も新潟県家族計画大会、新聞社、乳業メーカーなどと共催で乳児、3歳児などの表彰を行っていた。その当時のプログラムには来賓として新潟県知事、厚生省児童局長、児童局母子衛生課長などの挨拶もあり、現在とは比べるべくもない当時の小児保健に対する関心の高さがうかがい知れる。またこの頃から未熟児医療に対する関心が急速に高まり始め、優良未熟児保育指導者の表彰が研究会場で行われた。

また当時の主婦会館結婚相談室長の奈良林祥医学博士による「婚前の若者達は何を悩むか」という講演があり、現在では想像もできない当時の若者のうぶな姿が微笑ましく思われる。また小林会長が「最近の育児ノイローゼ」と題して講演され、経済が豊かになり始めた一方で核家族化による母親の悩みが問題化しつつあることが示唆された。

昭和37年には小林会長のもとで日本小児保健学会が新潟市で開催され、小林会長が「小児の発汗について」を特別講演された。昭和44年には新潟大学教育学部加藤謙先生による「子供の健康な精神の発達を歪めるものは何か」という特別講演がとりあげられ、現在の社会問題の萌芽はこの頃かと推察させられる。一方、昭和46年に小林会長は「小児癌、心臓疾患の早期発見および児童の蛋白尿について」講演され、現在広く行われている各種疾患のスクリーニングの端緒を開かれた。

堺会長時代(昭和51年~平成3年度, 第16~31回)

堺薫教授が会長に就任されてから研究会はさらに充実し、斯界の権威ある先生方の講演に加え、広く様々な分野のパラメジカルから演題を募り、一般演題数が増えた。また歯科医師、薬剤師、看護婦、助産婦、保健婦、栄養士の方々からも役員や座長になっていただき、幅広い分野にわたる討論が行われるようになった。また第19回(昭和54年度)には小学校の養護教諭による「保健室からみた児童の実態など」が一般演題で取り上げられ、家庭に問題がある児童などでは保健室へ異常を訴えてくることが多いことなどが発表された。これは現在大きな問題になっている「保健室登校」がこの頃からみられ始めたことを示している。また新潟大学歯学部掘井教授が推進してこられ、現在、その効果

が確認されている「フッ素洗口法による虫歯予防効果」も一般演題として発表され、大きな関心を集めた。

また「小児成人病(当時)」も注目を集めるようになり、県内のある地域を対象にした肥満検診、小児の血中脂質動態の発表などが行われるようになった。また昭和50年代後半では登校拒否と学業不適合、栄養過多、慢性疾患患児などの現代的な問題が取り上げられるようになった。

昭和60年代に入るとわが国母子保健の水準は非常に高くなったものの、反面、「物の豊かさ」のなかに「心の乏しさ」が様々な形で人間関係をむしばみ、社会的に幾多の問題が生じてきた。このような背景を踏まえ、日本小児保健協会の依頼により日本母子衛生助成会、母子衛生研究会、家庭保健背活指導センター、これからの母子保健を考える会などが企画した「母子保健研修会」と一部共催の形式をとることになった。これにより数年間、本研究会も若干の資金援助を受けるとともに「親の役割を考える」というキャッチフレーズが研究会に冠された。昭和60年前半の一般演題として未熟児(中)長期予後、中学生の貧血、感染症サーベイランス、低身長児に対する成長ホルモン治療などが取り上げられている。

一方、昭和63年10月28、29日に堺会長のもとで新潟では2回目になる第35回日本小児保健学会が開催された。講演集作成にあたり、堺会長から初山慈作氏の1952年の作品「きらきらちいさなおほしさま」という絵を是非表紙絵に用いたいとの強いご要望があった。作者は既に亡くなられておられたが、御子息の斗作氏が東京に在住されていることがわかり、営利目的ではないことなどを申し上げて御願いしたところ、無料で表紙絵に利用させていただくことを快諾していただいた。この絵は全体が淡いブルーの色調で夜空の星と子供の姿をモチーフにしたとても素晴らしい作品で参加者には非常に好評であった。

一方、それまで小児歯科関係の演題は「小児歯科」のセッションで発表されていたが、これらを「栄養」のセッションにまとめたことによ

り、多数の小児保健関係者が小児歯科関連演題の発表をきくことになり、小児歯科の先生方には大変喜ばれた。いつも独立したセッションで数少ない関係者だけで行われる小さなセッションは、演題を他の関連分野と混じえる方がより広い分野の保健関係者の関心と呼ぶ効果があるようだ。また懇親会に参加された方々には、お帰りになってから花を開くように新潟市特産のチューリップの球根を差し上げ、大変喜ばれた。

内山会長時代(平成4年～現在, 第32～42回)

内山 聖教授が会長に就任されてからは、それまで比較的関与の少なかった養護教諭、幼稚園、保育園関係者の参加を強く働きかけたことにより、演題の分野がさらに広がり、また発表数も大幅に増え最高で22題を数えたこともある。また特別講演では小児期からの成人病予防対策とその問題点(東京女子医科大学附属第2病院小児科 村田光範先生)、子どもの健康一からだと心から見た現代の問題(京都府立医科大学小児科 澤田 淳先生)、学校検尿で発見される疾患とその経過(日本医科大学附属第1病院小児科 村上陸美先生、学童の突然死とその対策(日本大学小児科教授 原田研介先生)、摂食障害の理解と治療(小倉クリニック 小倉清先生)、安心子育て等々、さらにシンポジウムでは県内の児童虐待の現状と対応をとり上げ、各分野の方々から発表していただいた。今年度、第42回は一般演題数は14で特別講演には「軽度発達障害の理解と対応—高機能広汎性発達障害や注意欠陥・多動性障害を中心に—」と題して筑波大学心身障害学系教授の宮本信也先生からご講演をいただいた。

このように昭和33年から続いている新潟県保健研究会の演題と活動内容を振り返ってみると、まさに戦後から現在に至る子ども達の疾病状況と社会的問題を反映したものになっており、小児保健にそれなりの貢献をなし得たのではないかと。今後も日本小児保健学会、同協会のご支援のもと、新潟県小児保健研究会は小児保健のより一層の充実を目ざして活動していきたい。